

曹洞宗海晏山宛陵寺季刊紙

第2号/平成17年春

はすのは

平成17年4月8日 発行人 浦辺世紀

発行所 海晏山宛陵寺伝道部 〒859-4527松浦市今福町仏坂免958宛陵寺内
電話；0956-74-0139 FAX；0956-74-1170 e-mail；cent@fine.ocn.ne.jp



定例坐禅会のようす（毎週土曜日夜7時）

コラム

龍水



「一寸坐れば一寸の仏」
坐禅は、ある状態を目指してキャリアを積むものではない。坐ることが安心、究極である。人間の習性は満足を求める。坐禅しても満足は無い。満足したからといってそれで人間の解決がつかはずが無い。解決などちょっと腹が膨れたの話だ。それで救われるなんてことは無い。またすぐ腹が減る。そんな問題にしないのが坐禅だ。満足したみたいに感じたり、救われたように思ったり、迷ったり、悟った気になったり。人間の生きている姿は色々な状態を呈しながら流れている。それを「菩提」という。真実はあなたを満足もさせないし、ガツカリもさせない。何とも無い。生かされた姿で手足を動かさず、自分の選り好みを捨てて坐れば・・・

（故酒井得元老師のことば）

晋山式境内整備事業と仏縁

護持会長 高橋祐一

宛陵寺八百年の歴史で幾度となく繰り返された事業の中で、その時々檀信徒様方のお寺への思いは強く、この度の事業の中で修復することになりました前机や幢幡など、寄進されました信仰の品々を見ると、仏様と御先祖様への深い絆で私達の菩提寺は守られてきたように思います。坂野免より移築され五十年の節目を迎え、昨年十一月境内整備事業の落慶式と併せて、第三十二世新命世紀和尚様の晋山式が行われました。八百年前に宛陵寺を開かれました、源久公が御先祖の家系であられます松浦弘様御夫妻や曹洞宗両大本山御専使老師をはじめ、総勢六十数名の和尚様方の御臨席を賜り、檀信徒皆様方のご参列のもと、第三十二世住職を迎え入れる式典が出来ましたことを、皆様と共に慶賀の至りでございます。新住職には今後益々御健康に留意され、一層の御研鑽を頂き、私達檀信徒の為に心の輪を持ってお導き頂き、現世の幸せと安寧の為に活躍頂きますことを願うものであります。

この度の境内整備事業を振り返って思いますことは、仏縁と思われることが多くを支えているようです。厳しい時局の中で事業を計画致しますことは、檀信徒皆様方にも大きなご負担と成りますることを先ず感じていました。結的には予算金額七千九百五十万円が、九千四百四十万円の事業金額となり、檀信徒一人当たり十五万七千円という金額に成りました。今考えましてもどの工事も外すことの出来ない貴重な工事だったと思っております。ただ予算を作ります時には景気も大変な時局であり八千万円を越えては皆様方のご承認を頂けないと思つたことは確かであります。そ

のようなことで主な工事のみ予算を計上し、後は仏のご縁を頂く他はなかった訳であります。当初は皆様方から頂いた寄付金申込書を集計しても計画金額には至らず、一時期は資金の借入れをも考えた時もありましたが、建設が進行するにつれ、皆様方の仏縁とご理解を頂き、追加の寄付金をお寄せいただきました。私の想像の出来得ない多くの金額を頂くことになり、思いも寄らず余剰金にまで恵まれることとなりました。貴重な資金として使用させて頂き、余剰金については今後の寺事業資金の為に特会計として収めさせて頂きます。

このように檀信徒の皆様方共々の喜びとなりましたことを深く感謝申し上げます。特に松永隆晶様には土地の借地並びに家屋の解体に依りて頂いたことは、一連の工事を進める上で大変な助けとなりました。この仏縁をこの上もない喜びと感じています。また業者の皆様方には大変なご協力とお力添えを賜り、その上加勢工事まで請負頂きました。山門鐘樓建築工事では大浦敬規様、田中重光様、石積土木工事では副島美一様、吉永重隆様、他多くの業者の皆様方の仏縁とご協力を頂戴し心より深く感謝申し上げます。

お陰様にて境内整備はおおかた整いました。実は庫裡裏の北側斜に石積み工事の必要な箇所が残されておりますが、このことは時期を見て考えておかねばならないと思っております。

皆様方には三年余りに亘り御支援御厚情をお寄せ頂きましたこと、心より感動の思いでございます。今後とも宛陵寺興隆のためにご協力いただきますようお願い申し上げます。仏様と御先祖様の御加護を頂いて益々の御健康をお祈り申し上げます。私の御礼に替えさせて頂きます。本当にありがとうございました。

これからの御案内

降誕会 (花祭り)

四月八日(金) 午前十時より、「降誕会花祭り法要」を修行します。お釈迦様ご誕生の法縁をお祝いする法要です。

いまから二、六一六年前、インド北部の村ルンビニーでお生まれになりました。仏教伝説によると、母の名はマヤー、生まれてすぐに天と地を同時に指さし「この世に二つと無いかけがえの無い命を戴いた・・・」と発せられた、空からは甘い甘露のごとき雨が降り注いだそうです。

お寺では華御堂をしつらえ、天と地を指さした小さな誕生仏に甘茶をそそぎ、おまつり致します。仏縁の深遠さと、私達の命の尊きことを喜び、拝み合う法要です。

十一時からは、潜龍の清浄寺、村畑保幸ご住職の説教法座を予定しています。「お袈裟の功德」について再度お話し戴きます。

ご多用とは存じますが、仏教徒として最重要な法縁です。どうぞご参詣下さいませようお願致します。

八日講

五月八日、六月八日は午前十時より「お八日講」を修行いたします。御本尊様とご参詣の方のご供養をいとなみます。お繰り合わせご参詣下さい。

宛陵寺要典に収録したお経を現代文になおして掲載します。原文はさし上げた「経典」をご覧ください。

経典をよむ

●摩訶若波羅蜜多心経 ①

「大いなる智慧に気付き迷いから脱する為の要の経」

(経典5ページの二行目～3行目)

世の中の見聞きするすべての物にとらわれず自由自在で、私たちを助けてくださる観音様が。絶対の安らぎに至るための智慧を行じていた時。『形ある物と、心の中の有りようは、固定した実体は無い(空)である』と観てとり。あらゆる人々の苦しみを救われた。釈尊の一番弟子シャーリプトラ(舍利弗)よ。形(色)のある物は固定性はなく(空)。固定性がない(空)からこそ様々な物が形(色)造られる。形があることその物が空の現れであり、空であるからこそ形として現れる。私たちの感覚(受)・記憶(想)・欲求(行)・意識(識)の心のはたらきも。また同じように固定性が無く移り変わっている。

仏事の深意

まくらぎょう
「枕経」

第2回

死の直後も耳は聞こえる!?

私も若い頃は、仕事とはいえ、たびたび死者の枕元に経をたむけることがとても辛く感じていました。亡くなっただばかりのお方はまだ生々しく、時には恐ろしくさえ感じたものです。必ず「末期の洒水」といって口から清水をさし上げる訳ですが、これが今生最後のやり取りになります。家族の皆さんにおかれては、黄泉路への旅支度で、湯灌や着替えで最後のお世話をなさるわけです。

「耳はまだ聞こえてるんだぞ」と教わったことがあります。だからこそ今ここで経を聞いてもらい、他界への大きな不安を治めて、安らかな旅立ちを願うのであります。

前回申し上げたり、完全な死に至っていない為、顔の上には軽く白い布をかけます。これはもし呼吸が戻った際に布が揺れるので、回りで見守る人達がすぐに処置が出来るようにとの意味も有るらしく、先人の知恵だそうです。ですから、後できちんと納棺を済ませると、もう可能性がないと諦めて、布を取りさるそうです。

「枕かざりは頭の上」。なぜならまだ完全な死では無い為、本人に対してお祀りせず、ご本尊やご先祖様に香華をたむけて、見守ってもらうのです。枕かざりは頭の上にお祀りし、実はその先にはお仏壇があるわけです。

枕元では言葉を慎み、死にゆくお方の安心を願うのみです。その場の言葉を、この世の最後の言葉として耳に

祥月命日の回向を致しましょう

三仏忌(降誕会・成道会・涅槃会)、彼岸会、施餓鬼会、八日講でご先祖の「祥月命日」の回向を勤めることに致しました。

毎月行う公式法要の中で卒塔婆(ソトバ)を書いて戒名を読み上げてご回向させていただきます。合同回向となりますが、敬しい法縁と思われれます。是非ご参加下さい。随時受け付けます。

回向料・・・五千元(卒塔婆代含む)

坐禅会をのぞいてみませんか

毎週土曜日の夜7時より一時間ほどです。老若男女どなたでも無料で自由に参加できます。一度きりでもかまいません。初めての坐禅もそのまま仏の姿です。

文責 宛陵寺住職 浦辺世紀